
人生のオークション

六条はじめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生のオークション

【Nコード】

N8140I

【作者名】

六条はじめ

【あらすじ】

権利の売買が出来るようになったここ日本国。

オークションという形式を利用して富豪も貧民も救済できると考えられ、このシステムは有難がられている。

ただし、売買した後は事務所も政府も責任は取らない。全責任はあなた方へ……。

権利を売買した挙句、人生を狂わされた人々の物語。

序章（前書き）

初投稿作品でございますが、よろしくお願いいたします。たくさんの方々のご意見で私の愚小説を磨いていけることを願っています。

序章

ドンドン！

「では以上で落札決定いたします。13番の方、600万円で落札です。」

”オークション”……競売とも呼ばれ、物品に対して購入希望者が支払う価格で競り合い、その額が最も大きい人が物品を購入できるシステムである。

どんなもの売ってでも生き延びたいという人もいれば、どんなに高くてもある権利を得たいという人もいる世の中、最近では権利の売買をもできるようになったここ日本国。

「次の商品に入りたいと思います。」

金銭を多く持つ人も少ない人もこの制度によって救われると重宝されてきた。

……それが、本当かどうかは明言できないのが現実なのだが……。

ドンドン！

木槌をたたく音がまた聞こえる……。

第1章・役立たず（前書き）

色々とやることがあるにもかかわらず、やはり執筆だけはやりたい。
様々な葛藤の末、更新いたしました。ぜひご覧ください。

第1章・役立たず

「……これにより、政府は権利売買を進めることを発表しました。」

平良は寝^{たいら}ばけ眼でTVをつけた。朝のニュースも彼女にとってはどうでも良いものなのだろう。

「個人全権売買法案が可決されたことで、今後は個人の権利においてどのようなものであっても売買が可能となり、それにいくらの価値をつけるかも自由になります。政府は権利売買の簡易化、権利売買に対応できる技術革新を促進していくことを提示しました。」

トースターで焼き終えたパンをかじりながら平良は

「何言つてんだか……。もうちょっと分かりやすく言えばいいものを。」

とTVに向かって文句を言った。

ふと時計を目にした。会社が始まる40分前を時計の針は指していた。

「あああああ！！ばかばか、私のばかりっ！」

普段、自転車を使って30分かかる所に平良の勤める会社がある。1番はやく来なければいけない身分だが、なにしろ目覚めるのが遅く、寝起きが悪い。もちろん遅刻は許されない。

急いで仕度をしたものの、結局は25分前になってしまい、遅刻はほぼ確定した。

「やばい……急げ……！」

自分にそう言い聞かせつつTVの電源を切り、家を即座に出た。全力で自転車をこぎ続け、会社に着いてからも慌ただしく走り続けた。3階にある「人事部」の扉を見つけると、平良は勢いよく開けた。

バンツ！

すでに集まっている同僚達は驚きつつ音のしたほうを一齐に見た。

「……おつ、おはようございま……す。」

「剣持君。今何時か分かるかね？」

「え……えー……とですね……。8時35分ですね。」

「5分遅刻だ。入社1年にしてどれだけ遅刻すれば気が済むんだ？」

「で、でも5分なら……」

「何を考えとるんだ君は。たとえ1秒でも遅刻は遅刻だ。とにかく、今から部会議を始めるから、荷物を置きなさい。」

部長に言われるままに平良は自分の席のほうに行き、荷物を置いた。ほかの同僚は部長の前に集まっていたので、朝の部会議は始まった。

「……ということ、それぞれ勤務にあたってもらう。最後になるが、今日から我々の商社には「競売部」という部署が作られることになった。我が「人事部」からは松山君と剣持君が「競売部」に移動となる。松山君と剣持君には詳細を説明する為、あとで私に直接聞くように。では、解散。」

.....はい？

「松山君と剣持君。」

言われなくても行きますよーだ。

松山青治と平良は部長の元に行く。

「先程言ったように君たちには新しく競売部に移動してもらったことになった。競売部はオークションを担当することになる。特に、つい最近可決された個人全権売買法にあやかって、権利のオークションを開催することにした。」

「権利のオークションですか？」

「そうだ。新部署だから人数も少ないかもしれないが、しっかりやってくれよ。」

平良はもともと、人事部があまり好きではなかった。人の移動や役職の上下……これらを司る人事部は恨み妬みが集中するときがあると言われていた。それよりなにより、自分が原因で他人を困らせたままにするのは平良にとっては一番耐え難いことだからだ。

また再び荷物を持って1年通った人事部をあとにした。階段を上る途中、松山と一緒にになった。

「松山さん、これからよろしくお願いしますね。」

満面の笑みで話す平良。しかし、松山の返答は正反対だった。

「君さあ。よく笑ってられるね。」

「.....えっ？」

「人事部のお荷物で、新人のくせに遅刻日数は1位。何も役に立た

なければ、言い訳ばかりする。君みたいな迷惑人種と組まされるなんてごめんだね。」

松山は足早に階段を上っていった。

（お荷物で……）

（言い訳ばかりする……）

（君みたいな迷惑人種と……）

（……ごめんだね。）

「……そんな。」

ここまで正直な感想を述べられたのは初めてであった。平良は自分がそこまで思われているのだと知った。ショックで止まった体を必死になって動かし、13階の競売部まで足を運んだ。競売部に入るともうそこには数名集合していた。

「……………オークション……………。一体何をやるんだろ
う……………？」

ガチャッ

扉の開く音がした。たった今入ってきた平良は驚きよろめいて、入り口のほうを見た。

「失礼、待たせてすまなかったな。」

そう言いながら入ってきたその人の顔を見て平良はいままでになく目を大きくさせた。

「……………何で……………」?

気づくとそこには膝を着いた平良の姿があった。

第2章・いざいざの再会（前書き）

機械の故障につき、更新が非常に長引きました。もともと執筆も遅いほうで大分時間があきましたが、ようやく第2章完成です。ごゆっくりご覧下さい。

第2章・いざいざの再会

「……………何で……………?」

開いた扉から現れた人物を見て、平良は絶句した。
周囲は

「副社長……!?!」

「何故副社長が!?!」

などとざわついている。

この人物、ふじわらゆうじ藤原優迹というこの会社の副社長であった。社長の息子であり、若くして高い役職に置かれている。

しかし、周囲の反応などよそに、優迹は平良を見るなり軽い口調で話しかけた。

「あれっ? モツチーじゃない?」

周囲の雰囲気が一瞬で崩壊した。場にそぐわない間の抜けた単語が聞こえた。

また、平良には変な目線が四方八方から浴びせられている。

「ふ、副社長。モツチーとは……?」

1人が場の空気に耐えかねて訊く。

「ああ。ここに倒れてる彼女のことだよ。なあ、モツチー?」

「……………いい加減にしなさいよ。」「

倒れていたままの平良がゆっくりと起き上がる。

「なんであんたがここにいのよ！？何がモッチーよ。あんたなんかそんな風に呼ばれたくないし、今仕事場だつてこと理解してないでしょ？だからあんたはバカなのよ。バカ優迺！」

「……………」。

「……………なっ……………副社長になんつう事言つてやがるんだ。完全にぼけたかこいつ……………」。

後ろで見ていて1人ごとを言う松山。他は完全に凍りついていた。

「はははははっ。モッチーは相変わらずだな。」

高笑いすると優迺は部長のデスクに座った。

「私が競売部の部長を務めます、藤原です。皆さんよろしく。」

『よ……よろしく願います。』

まさか副社長ともあるう人が一部署を直属として務めるとは思っていなかった為、人々は動揺していた。ただ、ある一人は動揺より苛立ちのほうに勝っていたようだった。

(……………何がよろしくよ。ふざけるんじゃないっての！)

平良は黙って無愛想に席に着いた。

#####

————その夜。

「結局あいつモツチーモツチー呼んでなんなのよっ！中学のときと違うんだってのに！」

文句を言いながら帰宅した平良であつたが、玄関前であるものに気づいた。

「あれっ？何か届いてる……………」

郵便受けの中から一通の封筒を取り出した。

「……………裁判員候補者通知……………」

ここ日本国には裁判員制度というものがある。重大事件に関して市民の目から判決をする司法に市民が大きく関わる制度である。今でもこの制度に賛成の人もいれば反対の人もいるのだが……。

「なんか面倒なことになっちゃったな……………」

家に入って椅子に腰掛け、封筒の中身をさも辛そうに見た。

「はあ……………」

人を裁くなどやりたくもなければ、正直に言っていると嫌いだつた平良は溜め息ばかりついた。

「……明日、会社に言わなきゃいけない……。…」

#####

翌日朝。遅刻魔の平良にしては早々と会社に来た。

ガチャ

「おはようございます。」

明るい挨拶に返ってきたのは

「やあ。モッチーおはよう。」

——優迩の声であった。

しかも競売部にはまだ彼しかいなかった。

「……………はあ。」

優迩が座っている席の前にいかにも嫌々そうな表情で平良は例の封筒を置いた。

「裁判員で呼ばれるから明後日会社休む。」

端的にそれだけ述べると部署内の給湯室に入った。

「ええ……。じゃあモッチー会えないんだあ。ショックだな。その日休もつかな……。…」

「……バカかあんたは。飯にも副社長なんですよ？ふざけたこと言わないで第1回権利のオークションの開催予定を考えなさいよ。」

お湯が沸くのを待ちながら言う平良。

「そんなことはとづくに決めてるよ。」

「えっ！？それでいつやるの？」

「1週間後。」

「1週間！？場所とか代表者とか…。参加者に、商品提供者まで決めなきゃいけないのよ？分かってるの？」

「ああ……。さすがモッチー、考えてるね。」

「対処は出来てるの？」

「だって今気づいたもん出来てる訳ない。」

「よくあんたそれで副社長が務まるね……。」

「褒めてくれてるの？」

「あきれてるの！！！！！」

ピーーーーー！

「あっっ！やかん！」

鳴る音を止め、お湯を注いでお茶を作った。

「あつ、僕のためにモッチーがわざわざお茶を……。ありがとう。」
「わたしが飲むの！」

一人給湯室で飲んでいると、向こうからいつもに無い真面目な声が聞こえてきた。

「……………何年振りだろうね。こうやって二人で話すの……。」
「……えっ？8年……そうだね8年振りかもね。」
「成人式るとき、君は見向きもしてくれなかったじゃないか。」
「何で貴方を探さなきゃいけないの。友達と喋ってたわよ。」
「そうか……。じゃあ2人きりは本当に中学以来か。」
「待って！変なこと言っただけじゃない？何その意味有り気な言い草。こんな他の誰かが聞いたら勘違いされるから止めて。」

――――

「もう聞いてるよ。」

ドア奥から声がある。

力チャ

「ま、松山さん！？」

入ってきたのは松山であった。

「昨日から気にはなってたんですが、副社長とこの人とどういう関係があるんですか？」

平良を指差す。

「君……何、松山君だっけ？そういう事を言う前に人のことを指差すのは止めたまえ。」

「あつ……。す、すみません。」

（あの松山さんが退くなんて…）

平良は改めて優迓が副社長なのだという事を理解した。

そうこうしていると仕事が始まる時間となり、競売部は熱気を持って取り組んだ。

#####

それから1週間後、平良が裁判員に選定されたと共に、第1回藤原商社主催、権利のオークションが開催された。平良が担当を勤めるのは後半の1部分であった。既にオークション会場で松山が担当をしていた。

ドンドン！

「35番の方、450万円で落札です。」

一段落したところで平良が入ってきて小声で言った。

「松山さん……交代です…。」

ゆっくり振り向くとすれ違いざまに松山は言った。

「会社初の企画をお前のせいでパーにするなよ。」

（……しませんよ。絶対に。）

心に誓って平良は壇に登った。

「では次の商品に入りたいと思います。販売希望の方、どうぞこちらへ。」

奥の扉から現れたのは初老の男だった。

「私が売りたいと思っているのは裁判員の権利です。
「わだすが売りで思っでんのは裁判員の権利だす。」

「えっ!!!?!」

会場と平良の空気はおかしな方向へと流れていった。

第3章・裏に潜む事件（前書き）

第1シリーズに突入いたしました。権利を利用する人々の攻防……。
……。
闇の計画が今始まります。ごゆっくりご覧ください。

第3章・裏に潜む事件

「えっ!!?」

裁判員の権利を売るという奇怪な人物が現れた。

「わたしは 田舎に いながさ 住んでいる 者で、 田舎には いながなん、 何に なつ
も無くて 何か売らないと なんが売らねば 死ぬんじゃないかと 死ぬんでねがど思ったんよ。 思ったんです し
したら 裁判員に選ばれる だっけ、 これでもいいから 裁判員選ばれで こいでもいから 売ってしまおうと 売っちまえって
思っで 来たんです 来たんた。」

「あのう……おっしゃってる意味がちょっと……。」

訛りのわからない平良が戸惑っていると、背後からささやく声が聞こえた。

「とにかくオークションを始める。ったく…とろいぞ。」

(松山さん……。)

「で、では今回の商品は裁判員を行う権利となります。ちなみにこの裁判は……最近起きた住宅街の殺人事件に関してだとか……。」

「んだ。 私 わだすなば この間 こないだ ここに こさ 上京したので 上京したんだもの 恥ずかしいけれど しょしげど何の どう
ことだが 分らないんですよ 分かんねんだもの。」

「……そういうことだそうなので、ではオークションに入りたいと思います。5千円からです。」

ドン！

木槌を叩き、平良はオークションをスタートさせた。だが、十数秒待っても誰一人として買うのに名乗り出るものはいなかった。

「えっ……。購入希望の方はいらっしやいませんか？」

「そんなもの買う奴なんかいないよ。」

「そっだそっだ。早く次に回してくれ。」

会場から野次が飛び交った。

（どうしよう……。こういう時って流さなきゃいけないのかな……。）

ふと、隣にいる販売希望の初老の男を見る。必死に拝むように目を閉じ、両手を合わせて握っていた。

（どうしても売ってあげなきゃ……。！）

「1万円！」

平良が迷っていたとき、急に会場から若い男の声が聞こえた。その声の持ち主はナンバーカードを頭上に掲げていた。

「こ、購入希望の方ですか……？」

「ええ。そうですけど。」

会場はざわついた。特別欲しがるものでもない権利を買おうとしたものが現れたのだ。そして……。

ドンドンー！

「61番の方。1万円で落札……………決定です！」

隣の男はしばらく手を合わせて泣いていた。

#####

「初仕事お疲れ、モッチー。」

相変わらず場にそぐわない言葉を発する優迩。オークションが終わったこの会場はなんとなく急にしんみりとしたように思える。

「何であんたが来てるの!？」

「だって、皆もう競売部に戻ってきててモッチーだけいないからどうしたのかなあって思ってた。」

「どうしたって、担当時間だからに決まってるでしょ。あんたが私を最後にしたんじゃない。」

「へえ………。忘れた。」

「バツカじゃない……!？」

平良があきれて帰ろうとしたとき

「……………待つて。」

という優迩の真面目な声がした。

「まだ何かあるの?」

「君の担当した最初のオークション、確か裁判員の権利についてだよね?」

「えっ…………。うん。」

「あの裁判、確か君が選ばれたのと同じはずだよな?」

「ああ。確かにそうだけど…………。」

「あんな需要の低い商品、何故好き好んで買う人なんかいたのか不

思議に思わないか？」

「そうか……それもそうだね。」

「なんか一波乱起こる予感がする……………そんな気がしてならないんだ。裁判、気をつけろよ。」

平良が返事をする前に優迹はオークション会場から出て行った。

「一波乱……か。」

優迹の言葉を噛み締めながら、平良は競売部へ戻りに行った。

ガチャ

部署の中に優迹の姿は無かった。別の場所にいるか、帰ったのだろうか。

「ふああ……。」「

だらりと椅子に腰掛けると

「気の抜ける声を出すんじゃないやねえ。」

背後から突然、松山の声がした。

「うわっ……………びっくりした、脅かさないでくださいよ松山さん。」

半分笑って半分泣いている何とも言えない表情を平良は見せた。

「君も初日から変な商品ばかり担当とは……。副社長に可愛がってもらってるようだが、本当は面倒な駒として扱われているんじゃないの？」

「別に……。あいつからどう思われようと関係ありませんから。」

「言つとくけどな、どんなに知り合いだからって会社の中では敬意を示せ。副社長がお前のことモツチーだか何だか言うのはまだ許せるけど、お前が副社長のことをあいつとか言うのは許せん。この上下社会の中、そんなことも分かなければ生きていけないんだ。いいな？」

「……………はい。」

「あと1つ言っておく。あの裁判員の権利を買った奴、何かやらかしそうだ。」

「えっ……。？」

（松山さん……………あいつと同じこと言ってる……………）

「確か君も同じ裁判だったはずだが……………あまり干渉するなよ、そいつに。」

「どうしてですか？」

「俺ら事務所には一切その後の責任を負わなくていいように出来ている。余計な問題を引き起こしてくるんじゃないぞ。全部政府の権売省に任せておけばいい。俺らの仕事は売るまでだ。」

そう一言忠告すると松山は部署から去った。

ただ平良はひたすらに2人の言葉を胸につかえていた。

#####

オークションから数日後、平良は裁判所に招集された。ついに殺人事件の裁判が始まるのであった。

裁判所に集まった他5人の裁判員の顔を見た。

（あつ……あの人、オークションにいた……）

予想通り、数日前裁判員の権利を買った謎の男もその場にいた。

（……………一波乱起こる予感がする……………）

（……………何かやらかしそうだ……………）

優迹と松山の言葉が平良の頭の回路を回った。

（ま、まさかね……………）

様々なことを考えているうちに法廷に入ることとなった。

—————

ガチャ

静まり返った法廷で扉の開く音が突然聞こえた。ぼさぼさしているながらも赤く染まった髪をもち、ピアスをつけてだらだらと歩いて法廷に入ってくる男。その者こそが今回の被告人針羽信鳴^{はりばねのぶお}である。いやいやそうに証言台に立った。

人定質問（被告人本人かどうかを確認する質問）が終わると、早速起訴状が朗読された。

「控訴事実。被告人、針羽信鳴は7月23日に……………」

大体の内容は裁判員に既に知らされていた。今回の事件の被告人は住宅街の民家に次々と侵入して盗みを犯し、その後進入しているところを住人1人に目撃されて、つい殺しに走ったそうだった。

「……………罪名及び罰状。住居侵入、刑法第130条。強盗殺人、刑法第240条。」

「被告人は不利なことを供述する必要が無い黙秘権があります。では被告人、今の起訴状について何か事実と異なる点がありますか？」

うつむき加減の被告人はぼそつと呟くように

「全部違え。」

とだけ言った。そして睨むように目の前を見たときだった。

「あああ——————！！！」

被告人が急に奇声をあげ始めたのだ。

「おい、溝淵みぞぶちじゃねえか？溝淵久しぶりだなあ。」

被告人が話しかけたのは裁判長ではなく、1人の裁判員であった。

（あの人だ……。オークションにいたあの人、被告人の知り合いだったんだ……）

平良はふとそう思った。その通り、オークションで権利を買った男……溝淵みぞぶち永は被告人と知り合いだったのだ。

（この人、まさか知り合いの被告人を無罪にするために……？）

「被告人は質問に関係ない発言を慎むように。」

注意されたものの、被告人はそれ以後ずっと笑いながら溝淵を見ていた。

- - - - -

裁判が一段落すると、裁判員は専用の会議室に移動させられることになった。

「さっきのあいつは何だ？被告人と裁判員が知り合いなんて許されるのか？」

「そうよ、あの人は止めさせるべきよ。」

他の裁判員があれこれ喋っていても、溝淵はただ黙って手を組み笑っていた。平良にはその表情が奇妙に見えて仕方が無かった。

ガチャガチャッ！

慌てて裁判長が会議室に入ってくる。

「溝淵さん。少しよろしいですかね？」

黙って溝淵は立ち上がる。周囲がざわざわとし、白い目で見るのも気にせず堂々と裁判長の前に立った。

「何でしょう？」

「溝淵さん、貴方は被告人の針羽信鳴と同級生ですね？」

「そうですよ。」

(あつさり認めた……………!!)

「たしか、権利売買で裁判員になられたとか？」

「ええ。」

「それで……。直前とはいえ気づかなかった我々も責任があるので、裁判員法第18条に裁判所がこの法律の定めるところにより不公平な裁判をするおそれがあると認めた者は、当該事件について裁判員となることができないと記載されています。同級生であるという関係が分かり、被告人も溝淵さんのことを相当知っているということが発覚した以上、関わりが深いと言いが無い。申し訳ありませんが、今回の裁判からは溝淵さんを外さざるを得ないと当裁判所は結論を出しました。」

少し黙りこくった溝淵であつたが、また再びにやけだした。

「来ると思いましたが、そういう言葉。でも、僕を外すことは出来ませんよ。」

「えっ!？」

「個人全権売買法第13条、売買して発生した状況において、すべての法律はこれを侵すことが出来ない。つまり、彼と関係があるうと、権利を売買した為に起きたことは裁判員法に触れようが何だろが全て無意味になるんですよ。だから僕は違反も何も犯していない。たとえ、これで彼を助けようとしてもね。」

(やっぱり!この人被告人を助けるためにわざわざあんな権利を買ったんだ!)

平良が気づいたころにはもう溝淵の計画は動き始めていたのだ。

横溝は不敵な笑みを浮かべている。

第4章 心透かす推測（前書き）

本当に長い事空いてしまいましたが、無事復帰を果たしました！
頻繁な更新にはならないかとは思いますが、今後ともよろしく願
いいたします。

本編の方も次第に第1シリーズ（裁判員編）のラストを迎えつつあ
ります。

では、ご覧下さい。

第4章 心透かす推測

（なんて奴………）

裁判員、溝淵は周囲をあざけるかのごとく笑っていた。

「自分は犯罪なんか犯してませんよ。ただ……あいつを助けた
いから、そのためだけに来たんです。くくくつ……。」

「………仕方ありません。法の下に従わなければい
けません。では、裁判員の皆さん、こういった状況抜きにして有罪
か無罪かの議論を行って下さい。」

裁判長はそう言ったが、周りの者は溝淵の姿を無視出来なかった。

「皆さん、どうしたんです？ 始めようじゃありませんか。」

わざとらしい声を出す溝淵。他の裁判員は白い目で溝淵を見て、黙
ったまま席に着いた。

少しの間、沈黙が残ったが、その空気を斬るように30歳位の女性
の裁判員が発言した。

「……ゆ、有罪ですよ、きっと。あの被告見ました？ いかにも悪者
そうだし、なによりあの態度はなんですか。自分の立場を自覚して
ないんですよ。」

それにつられたのか、若いひ弱そうな男の裁判員も

「………ですよね……。」

とだけ相槌を打った。

「しかし、それだけで判断するのはどうかと思うがね。確かな証拠はこれといって無いのだろう?」

眼鏡をかけたエリートそうな男性裁判員はそう言って反論する。

「でも住居侵入や窃盗は証言が多々あるんですよね?それだけでもまず決めた方がいいのではないのでしょうか?」

平良も積極的に発言をし続け、なるべくこの場の先導を握ろうとした。溝淵にかかれば有罪を無罪にされかねないからだ。

議論が続く中、突如溝淵は立ち上がった。

「では、先程、剣持さんがおっしゃったように殺人以外の件についてだけまず決めるのはどうでしょう?」

空気はやはり、がらりと変わった。被告人と内通した者だと分かったのだから当然といえよう。

ただ、多数決はいづれしなければいけないことだったので、特別反論する者はいなかった。

「じゃあ、住居侵入、窃盗に関して有罪だと思う方は挙手をお願いします。」

(普通こういう事は正式な裁判官が言うことでしょ……………!)

心の中で平良は呟いたが、有罪だと思う心境は変わらなかった。

静かに手を挙げた。

他の裁判官も次々に挙手した。

「――――っつーか、早く終わってくれればいいーからこっちにするう。」

という中には不真面目なギャル裁判員もいたことも手伝って、有罪側に賛成多数という結果に終わった。

――――

「本日は以上となります。皆さんお疲れ様でした。」

裁判長が終了させると皆は散り散りに帰っていった。

荷物をまとめて帰ろうとした平良は偶然にも溝淵と目が合ってしまった。相手が軽く会釈をしたので、同じく返したが腹の中では舌を出していた。

「お疲れ様でした、剣持さん。」

「ええ。貴方もさぞかしお疲れでしょうね。この日の為に計画を練ってきたのですか？」

「はい。もちろんです。そうでなければ、あんな商品落札する人がどこにいると思うんですか？」

「確かに。ふふっ、そうですね。今日の結果は不満でした？」

「はい？別に。当然だと思いますよ。」

意外な言葉をあっさりと溝淵は言っただけ。拍子抜けな発言に平良は驚きを隠せなかった。

「ベ……別に……ですって？貴方、彼を助けに来たんじゃないんですか？」

「そうですよ。」

「言ってる事が矛盾してるんじゃない？」

「そうかもしれません。自分だって人間ですから……………」

急に溝淵の目が遠くなったように見えたが、すぐに平良の目線に戻った。

「では、お先に。」

溝淵は独りでその場を後にした。彼の黒い影は遠く長く伸びていた。

- - - - -

独り家の中、平良はソファーに座り込んで黙って考えていた。

（住居侵入等については有罪でも構わないって事なの…………？）

（彼の目的って一体何なの…………？）

ふと急に溝淵の後姿が目に見えた。

（彼も独りぼっちだったんだろうか…………？）

（だから、彼にとっては唯一の救いが被告人だったのかも…………。）

平良は立ち上がると小さな仏壇の前で正座して、焼香した。

「独りって、寂しいものなんだね。」

そこには静かに手を合わせる平良の姿があった。

――翌日――

2回目の会議は朝から始まった。

この日の問題は、実際に被告人が殺人を犯したか、また、犯した場合の殺意の有無といったものが中心であった。

「殺害された被害者宅から出るのを目撃されたんだろ？間違いない針羽は殺人者だろう。」

昨日に続き、エリート男はよく喋る。溝淵の正体が分かったからだろうか？やけに有罪にこだわった。

「……だからと言ってすぐに決め付けるのはどうでしょ……」

溝淵が口を出してきた時

「お前には聞いてない!!」

とエリート男は叱責した。……正に敵意むき出し。

「落ち着いて考えてくださいということです。家から出ただけで犯人にされるのでは、誰でも犯人呼ばわりですよ？」

「お前はどうせ奴を助ける心積もりで来ているのだろう！？そんな言い訳聞く耳もたん！」

「待って下さい!!」

平良はそう言っただけに割って入った。

「……………何だ？貴方もこのスパイの肩を持つんですか？」

エリート男の軽蔑の眼が平良の目を刺した。

「……………そういう訳じゃありません。ただ1つだけ、溝淵さんに聞きたいことが。」

「……………何ですか？」

「本当に被告人を助けるつもりがあるんですか？」

意外そうな眼を見せた溝淵だが、すぐに返答した。

「なっ、何を今さら……。最初からそう言いましたよね？」

少し無言になって右下に眼を落とす平良。そして一言

「そうですか……………」

とあっさり呟くように言った。

この日の議論は決定的にはまとまらず、最終日である3日目に最終判断すること落ちていた。

その日の帰り道のことだった。

平良は何か溝淵の言動に対して不審に思ったようで、独り黙って考えながら歩いていた。

（このままだと明らかに有罪になるのに……………）
（彼の余裕さは何なの……………？）

自宅への帰り道、必ず通る場所があった。

――――藤原商社。平良の勤務先である。

裁判員初日の時は素通りしていたけれども、何故かこの日だけは立ち止まっていた。

大して遅い時間でもなかったが、流石に中は数える程度の人数だった。

平良は自然と中へ足を運び、気付くと競売部の前に立っていた。

（こんな私用、相談に乗ってくれる人なんていないか…………）

そう思いつつ扉を開けた。

だが、既に誰１人として部署内にはいなかった。

（こんな時くらいいてくれないじゃない、優迺……………）

ガタン

突然後ろで物音がした。

「優迹！？」

平良は声を出すと同時に振り返った。

「……………ん？なんであんだここにいるんだ？」

「ま、松山さん……………」

副社長、藤原優迹と思いきや、期待と違って松山が姿を現した。

「さっき、優迹って……、副社長のことか？」

「えっ、ま……まあ……………」

「全く……。いい加減呼び捨てはやめろ。」

「松山さん……………」

「……………何だ？」

「裁判のことなんですけど……………」

「あまり深く追求するなって言っただろ？」

「1つだけ話が。オークションで落札した人が被告人の仲間みたいなんですよ。」

「そんなことだろうと思ったさ。」

「でも、その人の行動を見ると、何と言ったらいいんですかね……
。被告人を助ける気配がしないんですよ。」

「はあ？なんだそりゃ。」

「矛盾してますよね？おかしくないですか？」

松山は考え事をするようにゆっくり椅子に腰掛けて言った。

「それは矛盾とは言わない。」

「えっ？どういうことですか？」

「あんたはあの男が被告人の仲間とは思えないんだろ？」

「まあ……そういうことですな。」

「じゃあ、それが真実だろ。」

「そ、そんな簡単に……」

「いいか？あの男が仲間だろうがそうでなかるうがそんな事は重要じゃない。大事なのはあんた自身だ。裁判員といえど人の人生預かってんだろ？だったら事件だけを真剣に考えるよ！仮にも権利のオークションを担当してる身なんだ。分かるだろ？その重大さが。人の人生をオークションしてるんだぞ、俺等は。」

「松山さん……。」

「早く帰れ。明日、最終なんだろ？」

「……はい。失礼します。」

部署を去り、商社を後にした平良。

平良はここで推測するのを止めた。ただ、その推測が人の人生を大

きく変えるとも知らずに……………。

辺りはすっかり暗くなっていた。

- - - - - 翌朝 - - - - -

留置所にいる被告人、針羽信鳴にも平等に朝は訪れた。

「針羽さん、お手紙ですよ。」

「……………あ？」

適当な仮眠をとってまだ眠気がとれない針羽に1通の手紙が届いた。

「つんだ……………人がクソ眠てえつつーのに……………」

文句を言いつつ封を開けて内容を読んだ。すると突然顔色を変えて叫んだ。

「つちきしょ……………！」

バシッ、と手紙を地面にたたきつけた針羽。

舞い落ちるその手紙の送り主の箇所には、「溝淵 永」という文字が記されていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8140i/>

人生のオークション

2010年10月28日08時31分発行